花き類・観葉植物

立枯病

留意事項

1 QoI剤≪１１≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 被害株は根周りの土とともに、ほ場外に持ち出し処分する。
2 被害植物残さや未熟な有機質は土壌に混入せず、完熟した有機物を施用する。
3 密植を避け、株元の通気を良好にする。
4 土壌消毒を行う。（ＸⅢ土壌消毒　参照）

・バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤 劇 ＜－＞
【20～30kg／10a　は種または植付前／1回】

・キルパー ＜－＞
【立枯病（リゾクトニア菌）・立枯病（フザリウム菌）　原液として60L／10a
所定量の薬液を土壌表面に散布し、直ちに混和し被覆する
は種または定植の15日前／1回】
【立枯病（フザリウム菌）　原液として60L／10a
予め被覆した内で、所定量の薬液を水で希釈し土壌表面に散布またはかん水する
は種または定植の15日前／1回】

5 発生が見込まれる時期に下記の薬剤を散布する。

・オーソサイド水和剤80 ＜Ｍ４＞
【花き類・観葉植物（除ばら、りんどう、せんにちこう、コスモス、ひまわり、シネラリア、スイトピー、みやこわすれ、アンスリウム、斑入りアマドコロ）
600倍　発病前～発病初期／8回】

6 発生を認めたら下記の薬剤を施用する。

・ユニフォーム粒剤 ≪１１≫＜４＞
【花き類・観葉植物（除きく、トルコギキョウ）　立枯病（リゾクトニア菌）
18kg／10a　土壌表面散布　定植時または生育期／3回】

・リゾレックス水和剤 ＜１４＞【500～1000倍　土壌かん注（3L／㎡）　生育期／5回】

苗立枯病

防除方法

1 被害株は根周りの土とともに、ほ場外に持ち出し処分する。
2 被害植物残さや未熟な有機質は土壌に混入せず、完熟した有機物を施用する。
3 密植を避け、株元の通気を良好にする。
4 発生が見込まれる時期に下記の薬剤を散布する。

・オーソサイド水和剤80 ＜Ｍ４＞
【花き類・観葉植物（除ばら、りんどう、せんにちこう、コスモス、ひまわり、シネラリア、スイトピー、みやこわすれ、アンスリウム、斑入りアマドコロ）
600倍　発病前～発病初期／8回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

黒斑病

防除方法

1 連作を避け、前年の被害残さを集めて処分する。
2 チッソ質肥料の多施用を避け、密植や過繁茂にならないようにし、風通しをよくするよう管理する。
3 排水を良好にし、土壌水分が高くならないようにする。
4 被害葉は早めに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・ポリオキシンAL水溶剤　＜１９＞【2500倍　発病初期／8回】

白絹病

留意事項

1 SDHI剤≪７≫は耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 連作を避け、他の作物と輪作をする。
2 土壌の表面を乾燥させる。
3 土壌に石灰を施用してなるべくpHを高くする。
4 被害株は株元の土とともにほ場外に持ち出し処分する。
5 土壌消毒を行う。（ＸⅢ土壌消毒　参照）

・バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤 劇　＜－＞
【20～30kg／10a　は種または植付前／1回】

6 発生を認めたら下記の薬剤を施用する。

・リゾレックス水和剤　＜１４＞【500～1000倍　株元かん注(3L／㎡)　－／5回】
・モンカットフロアブル40　≪７≫【1000～2000倍　株元散布　－／3回】

灰色かび病

留意事項

1 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
2 SDHI剤≪７≫、QoI剤≪１１≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 収穫後の作物残さは適切に処分する。
2 施設栽培では、施設内が多湿とならないようにする。
3 密植を避け、通気を良好にする。
4 被害株は早めに除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
5 発生が見込まれる時期に下記の薬剤を散布する。

・チオノックフロアブル　＜Ｍ３＞
【花き類・観葉植物(除りんどう)　500倍　発病初期／6回】
・セイビアーフロアブル20　＜１２＞

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

【花き類・観葉植物(除きんせんか、ホワイトレースフラワー)　1000倍
発病前～発病初期／4回】

・フルピカフロアブル ＜９＞
【花き類・観葉植物(除ばら、スターチス、宿根かすみそう、ゆり、りんどう)
2000～3000倍　発病初期／5回】

・サンヨール ＜Ｍ１＞
【花き類・観葉植物(除きく、ばら、ペチュニア、スターチス、プリムラ、パンジー)
500倍　発生初期／8回】

6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・アフェットフロアブル ≪７≫
【花き類・観葉植物(除きく、ゆり、チューリップ、りんどう)　2000倍
発病初期／3回】

・ファンタジスタ顆粒水和剤 ≪１１≫
【花き類・観葉植物(除きく、トルコギキョウ)　3000倍　発病初期／5回】

・ゲッター水和剤 ＜１０＞ ＜１＞
【花き類・観葉植物(除ひまわり、ゼラニウム)　1000倍　－／5回】

・ポリオキシンAL水溶剤 ＜１９＞【2500倍　発病初期／8回】

・ピクシオDF ＜１７＞【2000倍　発病初期／4回】

7 暖房機ダクトが設置されている施設内ではダクト内投入による処理法も有効である。(Ⅻ省力安全防除　参照)

うどんこ病

留意事項

1 ダコニール1000、ダコニールアルファに含まれる成分TPNの総使用回数は、6回以内なので注意する。

2 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

3 SDHI剤≪７≫は耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 日照不足に注意し、適正な施肥によって過繁茂にならないように管理する。

2 被害茎葉は早めに除去し、ほ場外に持ち出し処分する。

3 発生が見込まれる時期に下記の薬剤を散布する。

・ダコニール1000 ＜Ｍ５＞
【花き類・観葉植物(除ばら、きく、チューリップ、ゆり、りんどう)　1000倍
発病前～発病初期／6回】

・ダコニールアルファ ＜Ｍ５＞
【花き類・観葉植物(除ばら、きく、チューリップ、ゆり、トルコギキョウ、りんどう)　2000倍　発病前～発病初期／6回】

・エコピタ液剤 ＜－＞【100～200倍　発生初期／－】

・サンクリスタル乳剤 ＜－＞【600倍　－／－】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・カリグリーン ＜ＮＣ＞【花き類・観葉植物(除きく)　800倍　発病初期／－】
・サンヨール ＜Ｍ１＞
【花き類・観葉植物(除きく、ばら、ペチュニア、スターチス、プリムラ、パンジー)
500倍　発生初期／8回】

4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アフェットフロアブル ≪７≫
【花き類・観葉植物(除きく、ゆり、チューリップ、りんどう)　2000倍
発病初期／3回】
・アンビルフロアブル ＜３＞
【花き類・観葉植物(除ばら、きく)　1000倍　発病初期／7回】
・トリフミン水和剤 ＜３＞
【花き類・観葉植物(除ばら、きく)　3000倍　発病初期／5回】
・パンチョTF顆粒水和剤 ＜Ｕ６＞ ＜３＞【2000倍　－／2回】
・モレスタン水和剤 ＜Ｍ１０＞
【花き類・観葉植物(除カーネーション)　2000～3000倍　発病初期／10回】

菌核病

防除方法

1 連作を避ける。
2 被害茎葉などの残さは集めてほ場外に持ち出し処分する。
3 茎葉が過繁茂にならないように管理する。
4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・トップジンM水和剤 ＜１＞
【花き類・観葉植物(除トルコギキョウ)　1500倍　－／5回】

株腐病

防除方法

1 健全な種苗を用いる。
2 被害株は根周りの土とともに、ほ場外に持ち出し処分する。
3 被害植物残さや未熟な有機質は土壌に混入せず、完熟した有機物を施用する。
4 密植を避け、株元の通気を良好にする。
5 土壌消毒を行う。(ＸⅢ土壌消毒　参照)
・バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤 劇 ＜－＞
【20～30kg／10a　は種または植付前／1回】
6 発生を認めたら下記の薬剤を施用する。
・リゾレックス水和剤 ＜１４＞【500～1000倍　土壌かん注(3L／㎡)　生育期／5回】

茎腐病

防除方法

1 健全な種苗を用いる。
2 被害株は根周りの土とともに、ほ場外に持ち出し処分する。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

3 被害植物残さや未熟な有機質は土壌に混入せず、完熟した有機物を施用する。
4 密植を避け、株元の通気を良好にする。
5 発生が見込まれる時期に下記の薬剤を散布する。
・オーソサイド水和剤80 ＜Ｍ４＞
【花き類・観葉植物(除ばら、りんどう、せんにちこう、コスモス、ひまわり、シネラリア、スイトピー、みやこわすれ、アンスリウム、斑入りアマドコロ)
600倍　発病前～発病初期／8回】
6 発生を認めたら下記の薬剤を施用する。
・リゾレックス水和剤 ＜１４＞【500～1000倍　土壌かん注(3L／㎡)　生育期／5回】

アザミウマ類

留意事項
1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法
1 施設栽培では、開口部を防虫ネットで被覆し、成虫の侵入を防止する。
2 ほ場内外の除草を行う。
3 発生を認めたら下記の薬剤を施用する。
・ディアナSC ＜５＞
【花き類・観葉植物(除りんどう)　2500～5000倍　発生初期／2回】
・アファーム乳剤 ＜６＞【2000倍　発生初期／5回】
・ジェイエース水溶剤 ＜１Ｂ＞
【花き類・観葉植物(除ばら、きく)　1000倍　発生初期／5回】
・オンコル粒剤5 ＜１Ａ＞
【花き類・観葉植物(除きく、ストック)　6kg／10a　株元散布　生育期／3回】
・モスピラン顆粒水溶剤 劇 ＜４Ａ＞
【花き類・観葉植物(除ストック、りんどう)　2000倍　発生初期／5回】

カメムシ類

防除方法
1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アディオン乳剤 ＜３Ａ＞
【花き類・観葉植物(除はぼたん)　2000倍　発生初期／6回】

コナジラミ類

留意事項
1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
2 スタークル粒剤、スタークル顆粒水溶剤、アルバリン粒剤、アルバリン顆粒水溶剤の成分ジノテフランの総使用回数は、5回以内（土壌混和は1回以内)。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

防除方法

1 ほ場内や周辺の除草を徹底する。
2 収穫後の作物残さは適切に処分する。
3 施設栽培では、開口部に目合いの細かい防虫ネットを展張し、成虫の侵入を防ぐ。
4 下記の薬剤を施用する。

・スタークル粒剤、アルバリン粒剤 ＜４Ａ＞
【花き類・観葉植物(除きく、ガーベラ)　1g／株(30kg／10aまで)　植穴土壌混和
定植時／1回】

5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤 ＜４Ａ＞
【花き類・観葉植物(除きく)　2000～3000倍　発生初期／5回】
・コルト顆粒水和剤 ＜９Ｂ＞
【花き類・観葉植物(除チューリップ、ばら)　4000倍　発生初期／4回】
・ディアナSC ＜５＞【花き類・観葉植物(除りんどう)　2500倍　発生初期／2回】
・エコピタ液剤 ＜－＞【100～200倍　発生初期／－】
・カルホス乳剤 劇 ＜１Ｂ＞
【花き類・観葉植物(除きく、ガーベラ、シクラメン、アジアンタム)
オンシツコナジラミ若齢幼虫　1000倍　発生初期／4回】
・ラノーテープ ＜７Ｃ＞
【花き類・観葉植物(施設栽培)　50㎡／10a　作物体の付近に設置する
栽培期間中／1回】

アブラムシ類

留意事項

1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
2 スタークル粒剤、スタークル顆粒水溶剤、アルバリン粒剤、アルバリン顆粒水溶剤の成分ジノテフランの総使用回数は、5回以内（土壌混和は1回以内)。
3 ダントツ粒剤の成分クロチアニジンの総使用回数は4回以内。

防除方法

1 施設栽培では、開口部を防虫ネット（目合い0.8㎜以下）で被覆し、成虫の侵入を防止する。
2 ほ場内外の雑草を除去する。
3 下記の薬剤を施用する。

・スタークル粒剤、アルバリン粒剤 ＜４Ａ＞
【花き類・観葉植物(除きく、ガーベラ)　1g／株(30kg／10aまで)　植穴土壌混和
定植時／1回】

4 発生を認めたら下記の薬剤を施用する。

・スタークル粒剤、アルバリン粒剤 ＜４Ａ＞
【花き類・観葉植物(除きく、ガーベラ)　20kg／10a　株元散布　生育期／5回】
・スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤 ＜４Ａ＞

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

【花き類・観葉植物(除きく)　2000～3000倍　発生初期／5回】
・ダントツ粒剤　＜４Ａ＞
【花き類・観葉植物(除きく)　6kg／10a　生育期株元散布　発生初期／4回】または
【花き類・観葉植物(除きく)　1～2g／株　生育期株元散布　発生初期／4回】
・アディオン乳剤　＜３Ａ＞
【花き類・観葉植物(除はぼたん)　2000～4000倍　発生初期／6回】
・コルト顆粒水和剤　＜９Ｂ＞
【花き類・観葉植物(除チューリップ、ばら)　4000倍　発生初期／4回】

コナガ

防除方法
1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・エスマルクDF　＜１１Ａ＞【1000倍　発生初期／－】

オオタバコガ

留意事項
1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法
1 若齢幼虫のうちに防除する。
2 施設や簡易パイプ組みにより防虫ネット（目合い4mm以下）で被覆し、成虫の飛来を防ぐ。
3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アファーム乳剤　＜６＞【1000倍　発生初期／5回】
・プレオフロアブル　＜ＵＮ＞【1000倍　発生初期／4回】
・ディアナSC　＜５＞
【花き類・観葉植物(除りんどう)　2500～5000倍　発生初期／2回】
・フェニックス顆粒水和剤　＜２８＞
【花き類・観葉植物(除きく、りんどう)　2000倍　発生初期／4回】
・アクセルフロアブル　＜２２Ｂ＞
【花き類・観葉植物(除きく)　1000倍　発生初期／6回】
・エスマルクDF　＜１１Ａ＞【1000倍　発生初期／－】

ネキリムシ類

防除方法
1 被害株の周りを掘り、幼虫を捕殺する。
2 定植時に下記の薬剤を施用する。
・カルホス微粒剤F 劇　＜１Ｂ＞
【カブラヤガ　6kg／10a　作条処理土壌混和　定植時／1回】
3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・ガードベイトA　＜３Ａ＞【3kg／10a　株元散布　生育初期／6回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・アクセルベイト ＜２２Ｂ＞【3～6kg／10a　株元散布　生育期／6回】

ヨトウムシ類

留意事項

1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 若齢幼虫のうちに防除する。
2 施設や簡易パイプ組みにより防虫ネット（目合い4mm以下）で被覆し、成虫の飛来を防ぐ。
3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・アファーム乳剤 ＜６＞【1000倍　発生初期／5回】
・コテツフロアブル 劇 ＜１３＞
【花き類・観葉植物(除きく、ストック)　2000倍　発生初期／2回】
・プレオフロアブル ＜ＵＮ＞【ハスモンヨトウ　1000倍　発生初期／4回】
・フェニックス顆粒水和剤 ＜２８＞
【花き類･観葉植物(除きく、りんどう)　ハスモンヨトウ　2000倍　発生初期／4回】
・アディオン乳剤 ＜３Ａ＞
【花き類・観葉植物(除はぼたん)　2000倍　発生初期／6回】
・マッチ乳剤 ＜１５＞
【花き類・観葉植物(除きく)　ハスモンヨトウ　2000倍　発生初期／5回】
・オルトラン水和剤 ＜１Ｂ＞【1000倍　発生初期／5回】

ハマキムシ類

防除方法

1 綴り葉ごとほ場外へ持ち出し処分する。
2 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・アディオン乳剤 ＜３Ａ＞
【花き類・観葉植物(除はぼたん)　2000倍　発生初期／6回】

アオムシ

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・オルトラン水和剤 ＜１Ｂ＞【1000倍　発生初期／5回】

ハモグリバエ類

留意事項

1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

1 施設栽培では、開口部を防虫ネット（目合い0.8㎜以下）で被覆し、成虫の侵入を防止する。
2 ビニル等のマルチングにより土中で蛹化するのを防ぐ。
3 ほ場周辺の除草を行う。
4 被害株や葉、残さは、ほ場外へ持ち出し処分する。
5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アファーム乳剤 ＜６＞【1000倍　発生初期／5回】
・スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤 ＜４Ａ＞
【花き類・観葉植物(除きく)　1000倍　かん注(1L／㎡)　発生初期／5回】
・アクタラ顆粒水溶剤 ＜４Ａ＞
【花き類・観葉植物(宿根アスター、トルコギキョウ、きくを除く)　2000倍　発生初期／6回】
・ディアナSC ＜５＞
【花き類・観葉植物(除りんどう)　2500～5000倍　発生初期／2回】

クロバネキノコバエ類

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・ディアナSC ＜５＞【花き類・観葉植物(除りんどう)　2500倍　発生初期／2回】

ハダニ類

留意事項

1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 育苗時の防除を徹底する。
2 ほ場内や周辺の除草を行う。
3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・バロックフロアブル ＜１０Ｂ＞【2000倍　発生初期／1回】
・コテツフロアブル 劇 ＜１３＞
【花き類・観葉植物(除きく、ストック)　2000倍　発生初期／2回】
・ダニトロンフロアブル ＜２１Ａ＞【1000～2000倍　発生初期／1回】
・ダニオーテフロアブル ＜３３＞【2000倍　発生初期／2回】
・マラソン乳剤 ＜１Ｂ＞【2000～3000倍　発生初期／6回】
・アグリメック 劇 ＜６＞【花き類・観葉植物(除ガーベラ)　500倍　発生初期／5回】
・ダニサラバフロアブル ＜２５Ａ＞【1000倍　発生初期／2回】
・ニッソラン水和剤 ＜１０Ａ＞【2000～3000倍　－／2回】
・カネマイトフロアブル ＜２０Ｂ＞
【花き類・観葉植物(除ばら、きく、カーネーション、デルフィニウム)　1000倍　－／1回】
・ダブルフェースフロアブル ＜２５Ｂ＞ ＜２１Ａ＞【2000倍　発生初期／1回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・ポリオキシンAL水溶剤 ＜－＞【2500倍　発生初期／8回】
・エコピタ液剤 ＜－＞【100倍　発生初期／－】
・サンクリスタル乳剤 ＜－＞【600倍　－／－】
・サンヨール ＜－＞
【花き類・観葉植物(除きく、ばら、ペチュニア、スターチス、プリムラ、パンジー)
500倍　発生初期／8回】
・粘着くん液剤 ＜－＞【100倍　発生初期／－】

ネコブセンチュウ

防除方法

1 土壌消毒を行う。(ⅩⅢ土壌消毒　参照)

・バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤 劇 ＜８Ｆ＞
【20～30kg／10a　は種または植付前／1回】
・ネマキック粒剤 ＜１Ｂ＞
【花き類・観葉植物(除きく)　20kg／10a　全面土壌混和
植付前または定植前／1回】

ナメクジ類、カタツムリ類

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を施用する。

・スラゴ ＜－＞
【ナメクジ類、カタツムリ類、アフリカマイマイ、ヒメリンゴマイマイが加害する農作物等
ナメクジ類、カタツムリ類、アフリカマイマイ及びヒメリンゴマイマイの発生あるいは加害を受けた場所または株元に配置　温室、ハウス、ほ場、花壇　1～5g／㎡
発生時／－】
・ナメクリーン3 ＜－＞【1～3kg／10a　株元散布　－／6回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。